

156-

574

眞

の

教

020163-000-1

特16-330

眞の教

一乗院 独卑庵 / 著

M24.7

ABH-0378



眞の教

獨 卑

宇宙惟一真理の本體は、猶一天太陽の如し、朝に現じて夕べ

眼あるなしと云はれども、東天に現じて、此の宇宙を照す、實に是れ現滅

非滅たし、常住不變にてをわします、嗚呼、妙と云はんか、奇と云はんか、

此宇宙の萬法、森羅の諸法、亦た一として、此宇宙惟一真理の本體に基か

るは、なほ實に其功用大ありと申べし、吾人の心に、此宇宙惟一真理を

通得し、吾人の身に、これを行ふべきの道なかるへからず、是れ自力をも

て、通得し、自力をもて、開悟するを得べし、其自力とは主觀的なる、吾人の

精神力に由る、自力とは客觀的なる、此宇宙惟一真理の本體に由る、是れ

なり、吾人は、是れを標準となし、明鏡となして、自力、自力、是れ隔離すべきに

あらず、俱に融即をなして、最大幸福を得るの道なり、



然るに、人或は云はん、斯る宇宙惟一真理の本體本主なる者は、我々肉眼を以てこれを見る能はず、現に見る能はざる者、何を以て信ずるを得べきと、なるほど現に見る能はざる者をして、ありと信ぜしむるは、いかにも理なき様に思ふなれども、設ひ目に見へざるものとて、強ちになしと云ふべからず、喩へば彼の向の山の上に煙りの立つを見て、其下に火のあるを知るを得べし、煙りを見て火のなしとは云ふべからず、又我等當體四支五官の作用するをもて、心のあるを知るが如く、此宇宙惟一の本體に於けるも、亦た斯の如し、我々肉眼の目には見へざれども、常に此の宇宙の間にをわしきして、天となく、地となく、普遍圓滿して到らざる所なく、達せざる所なく、神通自在の力用、常に此世界に顯はれて、晝夜の別なく、我等一切衆生を利益し玉ふといへども、悲ひ哉、迷ひの凡夫にて之れ

を見奉ること能はず、我體にある眼耳鼻舌身の五官にせよ、手足の四支にせよ、作用する所は、是れ一心の力用なるも、其心を手にとり、現に見ること能はざるが如し、我等衆生無始より已來、迷ひに迷を重ね、此宇宙惟一の本體にてまします、無始無終、三世常住の本佛、本主の常に此宇宙の間にをわしきすることを知らざりき、幸ひなる哉、本佛本主の寶號たる、南無妙法蓮華經の御本尊にしてこそ、始めて知り、始めて信じ、我迷ひの雲のはれて、己身の佛性の眞如の月を詠むることを得たりき、斯く云は、又或は云はん、彼の耶蘇教の所謂造物主なる者と、殆んど類することなきやと、否決して左にあらざ、我云ふ所の宇宙惟一の本主と、耶蘇教の所謂造物主とは、天地雲泥も啻ならず、大に異なれり、何となれば彼の耶蘇教の立る所は、萬物を造ると云ふ造物主を立てり、我云ふ所の宇宙惟一の本主は、萬物を造るとは云はず、而れども萬物を支配する

の力用を有する者なり、喩へば我一心は、四支五官を支配するの力用を有すると異ならず、而れども一心が、四支五官を造るとは云はざるか如し、夫れ仰いで天象を觀るに、日月星辰は森羅羅列し、四季の運行をなして、時到り、節來り、天變にあらざるの間は、敢て違ふことのない、俯して地理を視るに、山川草木は、葦布整頓し、一織一芥事々、物々、一として理を具へ、相を顯して、盡く美を呈し、妙を究めざるはなし、斯る不思議なる實相の此法界に顯はれ玉ひしは、其不思議の妙理なくして、争で此法界に顯はれ玉ふべき、不思議の妙理ありて、不思議の實相此法界に顯はる者ならん、實相の此法界に活動するは妙理の此法界に存する故ぞかし、妙理實相二なれども、不二なるをば、惟一眞理の本體と申すなれ、例せば、我が眼の色を見、耳の聲を聞き、鼻の香を嗅ぐ、舌の味う、身の觸るゝ所、一として我一心の作用ならざるはなかるべし、此宇宙間も亦復斯の如し

此世界は大天地にして、我當體は小天地なるべし、大小異なれども圓融不二ならん、故に此宇宙法界に惟一眞理の本體おわしまして、晝夜片時だもたゆむことなく、此世界に作用を顯して、活動する所の妙相をば、無作の應身如來と申す、其作用活動する所の妙理をば、無作の報身如來と稱す、其妙相妙理不二一體なるをば、無作の法身如來と申す、是れ三身如來にてましますも、惟一の本體にてまします、所謂一身即三身、三身即一身にして、一跡不二古今同體にてこそあわすらめ、過去にも滅せず、未來にも生ぜず、無始無終、三世常住の本體にておわしますなり、蓋し此無作三身の本主本佛の寶號をば、南無妙法蓮華經と申し奉る、是れを我等一切衆生の模範とし、明鏡となして御本尊と崇め奉るなり、已に印度に在ては、釋迦世尊も、此宇宙惟一の本體の妙理をば、五十年の間種々に説法し玉ふ、中に法華經を説せ玉へし時だにも、唯た壽量品に

してこそ其功用功德の廣大無邊なる趣を説せ玉ふも所謂功德の果分のみにして未だ其功德の因分をば壽量品の文の底に秘して示させ玉はす未法萬年の弘法として、殘し置せ玉へり、故に釋迦世尊は、本果妙の教主にして、日蓮聖人は本因妙の教主あり、其行法天地懸かに異れり、彼れは印度月氏國、此れは東洋日本國なり、

然るに斯る大法も、時至らされは、世尊の滅後正像二千年の間、猶説示する能はず、又た是れを顯すへき人もなかりき、彼の龍樹、天親、天台、傳教等は、内監冷然と申て、内には知しめし玉ひしかども、時機至らされは、言葉に出して述べ玉はず、然るに未法に入て今を去ること六百年の頃、日蓮聖人我日本國に出現し、此宇宙惟一本主を我等一切衆生に知らしめ玉はんとして、寶號たる南無妙法蓮華經を書顯し、其本體本理なるをば示し玉へて、我等衆生の心に念ずへき明鏡となし、身に行ふへき標準とし

玉はんが爲に、身命を抛せ玉へて、遠流刀杖等の大小種々の難に値はせ玉ふも、御身に忍ばせ玉へて、我等一切衆生に醫者の良藥を、病ある者の口に服せしむる如く、悲母の赤子の口に乳を含めしむると等しく、此宇宙惟一本主の寶號たる、南無妙法蓮華經の御本尊を口に唱へしめんとして、一切衆生をあわれみ救はせ玉ひき、然るに南無妙法蓮華經の御本尊は、文字にて書顯し奉るといへども、此宇宙の間におわじます、惟一真理の本體にして、即ち無作三身の本佛、本主の寶號にてましますはなり、三世十方の諸佛も、此御本尊に由らせ玉へてこそ、佛にはならせ玉ふらん、故に經文には諸佛の寶藏、十方三世の諸佛の眼目、三世の諸の如來の出生する種なり等と説せ玉へき、されば此御本尊は、三世十方の諸佛の御師、一切衆生成佛の模範なり、所詮此御本尊の外に、彌陀、觀音等の諸佛菩薩の偶像を並べざるも、此御本尊の中には、一切の諸佛菩薩一切

の森羅萬法悉く皆籠らせ玉へて、一として漏るゝことなく、住し玉へばなり、喻へば日本の二字の中には、三府四十縣の國々、及び人畜財産等一も残さず、其内に攝さるはなく、大海の潮の水の一滴に、江河の諸水悉く納めずと云ふことなし、若し此御本尊の外に、色相の偶像を並ぶるは、却て諸佛菩薩の本意に戻り、又道理にも相背かん、己に經文には、形像舍利を安くべからずと説れしは是れなり、されば此御本尊には三世諸佛の因行果徳萬善萬行の諸波羅密の功徳を、悉く備へさせ玉へばなり、故に我等衆生湖地の凡夫にして、設ひ一文不通の者なれども、此御本尊の功徳力に由て知らず、釋迦世尊と異ならず、日蓮聖人と同躰不二の佛果を成ずること敢て疑ひなかるべし、小兒が乳を呑むに、其味を知らされども自然に身を養ふ、耆婆が妙藥離れか辨ひて服すべき、鐵道蒸瀛の機械運轉の道理をば知らざれども、是れに乗る時は、一瞬間に千

里の道を行きて、都會の花鳥風月を詠むることを得べし、今此一切萬法の備へ玉ひる御本尊に由るは、恰も鐵道蒸瀛に由るか如く、御本尊の南無妙法蓮華經を唱ひ奉る、信心の自力の手形にてこそ、此土よりして寂光の都を感見し、諸佛菩薩と共に自受法樂をし奉ること、樂しども中計なし、但し是れ信心の厚薄によるべし、信心の手形なくして、寂光の都を見ること難かるべし、返すくも信心を勵むを要すべし、佛法に入るの根本は、信心を以て本とせり、此信心の内に一切の修行悉く備へ玉ひばなり、妙樂日以信代惠と南無妙法蓮華經

廢偶像說

獨卑庵

廢偶像之說。基于佛教之實說。而非私說也。余也爲之主說者。惟不過除綱紀廢滅。秩序紊亂。方今唯知有彌陀觀音等之諸佛菩薩。未知宇宙唯一真理之本主也。恰如彼奉多神教者耳。何不顧之甚。蓋憂世之人。率先除害者多矣。維新之際。勤王之士。奉一天萬乘之天皇。廢二百有餘之列藩。當時人皆知有各藩諸侯。不知有天皇。綱紀擾々。秩序紊亂。廢之亦宜也。今廢偶像之說者。唯是憂慨佛教而已。當與廢藩之說併論焉。蓋余之所謂爲之主說者。在奉宇宙唯一真理之本主。以爲本尊。故經曰。不須復安形像舍利。天台曰。未必可安形像舍利。是非私說也。

明治廿四年七月四日印刷
明治廿四年七月六日出版

東京本所區小梅常泉寺内

(施本)

日蓮正宗布教會本部出張所

東京市淺草區北清島町七十八番地寄留
愛知縣土族

兼著作者 下山 健治

印刷者 島 連太郎

印刷所 東京市京橋區四紺屋町廿六七番地 英舍